
月と太陽の狂騒曲

水月 灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と太陽の狂騒曲

【Nコード】

N7221I

【作者名】

水月 灯

【あらすじ】

——恋とは、堕ちるものだと思った。

ある女子高の頂点に立つ少女と、見た目美少女な、一男子校生。二人の出会いがちょっと変わっていた。

双子の兄の陰謀で男装させられた少女と、友人の罠に掛かって女装させられた少年。

これはそんな二人の、ちょっと異色な物語。

第一章

きやあああつー！！……と、悲鳴のような嬌声があちらこちらで上がった。

「お姉さまーっ！！」

「こちらをお向きになって！」

「ちよつとあなた、お姉さまに馴々しすぎてよー！！」

「何を仰っているの？！ あなたこそご自分の顔を鏡で見出直していらしたらどう？！」

「まあ！なんてことを！」

「お姉様ーっ！」

「お慕いしております、お姉様ーっ！！」

「邪魔ですわっ！ お姉様、贈り物です、お受け取りくださいー！」

「まあ、抜け駆けよ！ お姉様、わたくしもー！！」

「わたくしもよー！！」

ぎやあぎやあと揉める乙女達の熾烈な諍いに、困ったような笑顔を見せながら、彼女は柔らかく言った。

「ありがとう、皆さん。でも、そんなに焦らないで。怪我でもしたら大変よ。女の子は特に、自分を大事にしなくてはね？」

ふわりと聖女の如く微笑まれ、乙女達は陶然とした。

「お姉様…わたくしのことを心配してくださるなんて…」

「あら何を言ったらっしゃるの？ お姉様はわたくしに…」

「いいえわたくしが…！」

おさまらない言い合いを鎮めるのは、やはり凜とした鶴の一声。

「皆さん、私は所用がありますので、失礼致しますわ。…ごきげんよう」

につこりと、しとやかに微笑んで去りゆく背中を、ごきげんようと唱和しながら、乙女達は熱い眼差しで見送った。

「素敵…お姉様…」

誰かが呟いた一言に、異論のある者は誰一人としていないのだった……。

十月と太陽の狂騒曲†

〈The first movement〉

立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花――。

そんな、美人を形容することばの良く似合う……否、これ以上は似合うまいという程美しい少女が、隣接する学校――私立香月女子高カツキ等学校には在席する。

……此処、私立灯陽男子高トウヨウ等学校では、その噂を知らぬ者はいない。

件の凜とした芯の強さが窺えるらしい美少女を一目見ようと、しばしば隣の正門を覗き込もうとする輩もいるとか。
まあ、件の少女だけでなく、花の園を見たいと思う生徒は多いのだけれど。

「…なあ、^{スバル}昂―」

嘆息しながら、机に伏した少年は、傍らの友人に声を掛けた。
多少くせつ毛の焦げ茶色の髪に、同色の大きな瞳は子猫のよう。
小さな顔に白い肌、桜色の唇。
彼は、少女のような可憐な容貌の持ち主だった。
細い腕を枕にしていたが、友人の返答が無いことに気付き、訝しげに顔を上げる。

「…昂？」

はつと我に返ったように、漸く彼の友は口を開いた。

「な、何？」

可愛らしい顔立ちを更に怪訝に染めて、彼は首を傾げる。

「…なんか、今日お前、おかしくないか？」

「っ……。…気のせいだろ。俺はいつも通りだ。それで、何？」

冷静に対応してくる姿は普段通り。

まだ多少腑に落ちないながらも、一応は納得して用件を述べた。

「あのさ…噂の子って、そんなに綺麗なのかな？俺、まだ見たことないんだ」

元々、それほど関心は無かったのだが、あまりに皆が騒ぐものだから、多少なりとも好奇心はわいてくるのは当然のことだった。

隣校には何人も騒がれる少女達がいる。香月も灯陽も、良家の子女・子息が多い為に色々な意味で目立つ存在は多数いた。けれども彼の噂の主は中でも群を抜いているのだ。

「…さあ。顔の美醜なんて、個人の価値観の違いにもよるだろ」

顔を伏せがちにそう告げた相手に、彼はむーと唸った。

「そーだけどさー…」

「…そんなに気になるなら、見に行けばいい」

心なしかその台詞に僅かに刺があった気がして、内心首を傾げながら、言われた内容にむっとした。

「やだよ。その子が可哀相じゃんか」

「…え？」

驚いたように目を見張ってくるから、彼は何を驚いているんだと言を続ける。

「見せ物じゃないし珍獣でもないんだから、冗談半分で見に行くのって失礼だし、その子を人として扱ってないだろ」

「……………」

「昂？」

「……………」

「…おーい？」

無言で固まっている相手の目の前に手を持ってきて、手のひらを打ち合せた。

高い音にびくりとした友人は、目をしばたかせて焦点を合わせてくる。

「大丈夫かー？」

「あ、ああ。悪い…」

いつもと様子が違うのがやはり気になる。

心配そうに顔を歪めて、彼は言った。

「お前、どうか悪いんじゃないか？もう早退しろよ。先生には俺から言っておくから」

「え、でも…」

「いいからっ」

「…わかった…」

渋々の了承に、彼は満足げな笑みを浮かべたのだった。

第一楽章（後書き）

初めの乙女たちのやりとりから膨らんだ物語です。

もしかしたら主役二人より周囲の方が濃いかもしれません。
気に入って頂けたら幸いです。

(2)

香月と灯陽は、隣り合って立地している。

同系列という訳ではないが、それぞれの創設者が知己の仲であつたらしく、校舎を隣接させ、名前も対の太陽と月に因んで付けられたのだそうだ。

度々両校は、親睦を目的に合同の企画を催すことがあり——その中に、年に一度開催される、香月と灯陽の生徒の人気投票があつた。各々、上位二十名までの選出だ。

上位数名はしばしば生徒会に選ばれることもあるし、そうでなくとも功績を認められたのだから奨励賞を貰つたり、何らかの特典を得たりする。

故に、生徒達には中々重要なイベントなのであつた。

人気投票のトップに立つ者は、容姿や性格は勿論、あらゆることに於いて最上である者が選ばれる。

特に香月のトップは、名実共に才色兼備な女子でなくてはならない。そしてその頂点に立った女子生徒は、『月姫』と呼ばれるのだ。

——宮城^{ミヤギ}浹は、史上初の、二年連続『月姫』となつた十七歳の少女である。

清楚で秀麗な容姿に加え、性格も申し分なく、万人に平等に接し、人を惹きつけるリーダーシップを併せ持つ。

その彼女が、隣校の灯陽にまで知られている、噂の有名な美少女である。

後輩だけでなく先輩からの信頼も篤く、女子生徒しかない香月でも、彼女は絶大なる人気を誇っていた。

——それこそ、親衛隊なる存在まである程に。
熱狂的なファンも多い。

その全てを、決は穏やかな微笑みで許容して過ごしている。
……くどいようだが繰り返しておく。

香月は——女子校である。

玄関の扉を開いた瞬間、声が降ってきた。

「お帰り」

視線を上げれば、壁に寄り掛かって腕を組む、一人の少年が居た。
短い黒髪は艶やかで、長い睫毛に縁取られた切れ長の双眸もまた漆黒。

少しはだけたシャツの開襟から覗く鎖骨が、妙な色香を放っている。
人を惑わす芳香を漂わせる華のような容貌は、十人が十人認める程、美しかった。

年の頃は十六、七といった所か、身長は百七十と少し位で平均的だが、成長期なのだからそのうちまだ伸びるだろう。

口端を釣り上げて笑むその少年を、険のある眼差しで睨み付けた。

「…よくもまあ、そう愉しげに仰ることが出来ますね…？」

その声は、目の前の少年とよく似通っていた。

掛けていた度の入っていない眼鏡を外して相手に半ば投げるように押しつける。

長めの前髪を掻き上げたかと思うと、そのまま髪を引っ張り——するりと、外した。

ウィッグの下から流れ落ちたのは、長く美しい黒髪。
露にされた顔は、突き合わせている少年のものと瓜二つ——。

「貴方のお友達は、私が貴方ではないと薄々気付いていたようでしたよ？」

台詞の中にちりばめられた刺を耳にしても、少年は艶然と微笑みを浮かべるだけ。

「聞いていますか、昂？」

灯陽の学制服に身を包んだ側が、多少苛立たしげに、私服の少年にそう呼び掛けた。
それはつい先程まで、自分が呼ばれていた名前だとわかっていながら。

「大丈夫だ。あいつは肝心な所で鈍いから」

受け取った眼鏡を手の中で弄びながら、少年は笑う。

「誰にもばれちゃいないさ。今日の『俺』が、実は本人じゃなくて双子の妹——それも、香月の『月姫』だったってことにはな」
「……………」

無言のまま不機嫌に歪められた顔を見て、少年は声を上げる。

「こら、^{アムネ}。眉間に皺を寄せるんじゃない。美人が台無しになるだろ」

「…自分と同じ顔を誉めるのって、遠回しに自分を誉めてますよね」
じっと見られて、少年——昴はつと視線をそらし、何事も無かったかのように奥に引っ込んだ。
兄に呆れながら、妹は万感の想いを込めたため息をついたのであった。

後を追って入った居間のソファで、完全に寛いでいる自分と同じ顔の少年。

「…そういうえば、昴？貴方、体調が優れなかったのではありませんでしたか？」

剣呑な雰囲気のに、兄は神経を逆撫でするほどさわやかに微笑んでみせた。

「ああ、風邪な。もう治ったみたいだ」

「それはそれは…随分と都合のいい風邪ですね？」

にこやかに浹は言った。

流石に妹の背後に渦巻く暗雲を無視できなくなったのか、昴は身を起こして頭を掻く。

「…まあそう怒るな、浹。誰か良い男はいなかったか？」

愉悦を顔に浮かべての言葉に、下世話なことを言つたと冷たい答えが返ってくると思いきや、

「え…」

意外や意外、浹は瞠目し、視線を泳がせた。

「い、いませんよ…そんな人」

躊躇いは時間にして一、二秒だったが、昴にわからないはずがない。ぴーんときた兄は、何か面白いネタが転がっているとわくわくした。表面上では内心の期待を押し殺し、平静を保つ。

「そうか…悪かったな」

「え…？」

「いや。いくら体調不良で単位を取っておかないといけなかった授業があつたとはいえ、代わりに女のお前を男子校に行かせたりして…嫌な思いばかりしただろ？」

「い、いいえ、あの…その…」

動揺していた浹は気付かなかった。

自分の兄が、普通、そう簡単に謝ったりしないことに——すまなそうな顔の裏で、ほくそ笑んでいることに。

「粗野で乱暴でむさ苦しい奴ばかりだつたら」

「え…でも…」

「——ああ、でも一人違うのがいるよな」

「…っ」

今思い出した、というように呟きながら、横目でちらりと盗み見ると、浹の目は再び彷徨っていた。

「…俺の一番の仲良し君、和葉は、そんなに鬱陶カズハしくないよな—」

その名を出した瞬間、浹の首筋がほんの少し、赤くなった。

——ビンゴ、と昴は密かににやついた。

妙に鋭いくせに結局鈍感な、少女のような外見の親しい友人……都^ツ築和葉が、キーポイントだ。

「……浹。かーわいかったろ？か・ず・は」

「……っ！？」

耳元で意味深に囁かれ、慌てて目を合わせると——昴は、にやりと悪戯を思いついた子どものように笑っていた。

ここにきてやっと、明晰なはずの頭脳が、はめられたとの結論を叩きだした。

思わず呆然とする前で、昴は笑いながら言う。

「まさかお前の好みがアレとはねー…相当な面食いだな」

「……っすば、」

「——それで、お兄様に何か聞きたいことはないかい、浹ちゃん？」

さわやかに胡散臭く微笑む兄の背に、悪魔の羽が見えた気がした。

——容姿端麗、頭脳明晰……完璧に思える宮城浹の唯一苦手な存在。それは、本性は天上天下唯我独尊を地でいく、血を分けた実の双子の兄——宮城昴なのだった。

第二楽章

細く息を吐き出す表情は、憂いを帯びている。

長い睫毛が陰影を落とす整った顔は、普段よりも少しばかり冴えなかった。

けれどその常には見られない少々の陰りが、美貌を際立たせてもいる。

「お姉様…」

その姿を、物陰からそつと、心配そうに見守るいくつかの人影。

「お疲れの様子ですけど…どうなされたのでしょうか…？」

「おいたわしい…早く元気になるとよいのだけれど…」

ひそひそと囁き合う彼女達は、実は彼の麗人の親衛隊幹部であった。

「…わたくしの思い過しでしょうか…」

ひとりがぼつりと呟いた言に、皆の注意が向いた。

一気に視線を向けられた少女は、躊躇いがちに述べた。

「…もしかしてお姉様、恋をしていらっしゃるのでは…」

乙女達はざわついた。

「そんな…！」

「まあ、わたくしのお姉様が、そのような…！」

「貴女、何を仰っているの！？ お姉様は貴女のものではなくってよ！」

「…お姉様が…まあ…」

「ちよつと貴女、しつかりなさつて！」

「誰か、SPを…！」

乙女達がきやあきやあと騒ぐ中、くらりと意識を失った一人は、駆け付けたSPの人々によって運ばれていった。

衝撃のあまり倒れた少女を心配する言葉を折り混ぜながらも、乙女達の関心はやはり麗しの姫君に戻っていく。

「大丈夫かしら…」

「きつと、お姉様のことがあまりにショックでしたのね」

「わかりますわ、そのお気持ち…」

「ところで、お姉様のことですけれど…」

「最近、ますますお綺麗になられた気が…」

「そういえば…」

「お相手はどここの御方かしら…」

「どなたかが抜け駆けを…？」

「いいえ、親衛隊の規則は皆様ご存じのはず…」

「…まさか、霧崎様…？」

「なんてこと…」

「でも皆さん、お姉様が恋をなさっているなら、応援してさしあげなくては…」

最後の一人の台詞に、動揺しながらも皆頷いた。

そうして、悔し涙にハンカチを濡らしながら、一同で愛しの君を見守り続ける。

陰ながら応援させて頂きます、と各々心の中で誓い合った。

——同時に、相手が彼女達の姫を手荒く扱ったならば、決して許しはしないと決めながら。

彼女達は完全に、相手は同じ学校の者だと認識していた。

……香月は女子校、なのだけれど……。

†月と太陽の狂騒曲†

〔The second movement〕

「……………」

ほう、と宮城浹は息を吐いた。

憂える様もまた麗しいと、その姿を幾人も見られて逆に感嘆されているとはつゆ知らず、物思いに沈む。

思い描くのは、あの日のこと。

ある朝、いつも通りに学校へ行こうと支度をしていた所、兄がやって来て彼女を呼んだのがすべての発端だった。

「―― 浹…」

ひどく具合が悪そうな顔色で名前を呼んでくる兄に、慌てて近寄る。

「昂…！どうなさったんですか、何か病気にでも…」
「ん、風邪引いたらしい…」

兄の言葉に、浹は目を見開いた。

「珍しいですね…私は何ともありませんけど…」

不思議なことに、彼らは病気にかかる時はいつも、まるでタイミングを計ったかのように共に寝込むのだった。双子の神秘だろうか。そうそう病気になったことは無いけれど、数える程の病の体験はいつも、二人一緒。

だから、兄がひとり風邪を引いたということが、浹にはかなりの衝撃だった。

その驚きが冷めやらぬ内に、昂は更に驚愕すべきことを言う。

大丈夫ですか、と問い掛けた妹に、

「いや、ちょっときつい…」

本当に怠そうなので、浹は心配げに昂を見つめた。

「病院に行った方が…それとも、お医者様をお呼びしましょうか…？」

「いや、いい。…学校に行く」

浹は目を剥いた。

こんなに体調が悪そうなのに、一体何を言っているのだ。

「昴、何を…!」

「で、いつもは自分で行ってるけど、今日は浹の車に乗せてもらって一緒に行こうと言いにきたんだが…」

「駄目ですよ…!車で一緒に行く位何でもないですけど、昴は病氣なんですから、寝てないと…」

「でも今日、出ないと単位が危うい授業が…」

「そんなもの…!」

一途に心配する妹を見ながら、兄は腹の中である企みを抱いていた。彼が密かに笑っていることに、忠実な妹は気付かない。

「行かなきゃいけないんだ…」

「昴、お願いですから安静にしてください。学校には、私がれん、」

連絡をしておきますから、と言うつもりが。

「…え、代わりに行ってくれるのか？」

「…はい？」

目を点にする浹に、昴は嬉しそうに言った。

「そうか、浹が代わりに授業に出てくれるなら、単位も大丈夫だし問題無いな。お前の学校の方は休むことになるのが少し悪いとは思うけど…」

「す、昂？」

「え？行ってくれるんだろ？…それとも」

明るい笑顔が曇った。

「やっぱり気が変わったのか…？」

「…っ」

捨てられた子犬のような目で寂しそうに昂が呟く。
妹は、兄のこの表情に弱かった……。

「い、いいえ。私にできることならなんでも…」

つい、そう答えてしまったのが運の尽き。

いつもは瞬時に回転する頭が回っていないまま返事をしてしまった
為に、あらよあらよという間に、ウィッグを被せられ、昂の制服を
着せられ、眼鏡を渡された。

いつも眼鏡を掛け、長めの前髪で隠して俯きがちになっているから、
顔を見られる心配は無い。十センチも違わないから、身長は底の高
い靴を履いていけばいいし——不思議なことに、ズボンさえ履いて
いれば厚底とはわかり辛い靴、所謂シークレットブーツ的なものが
何故か家にあり、教室も靴で入って大丈夫だと言われた——体型も
あまり変わらないから、口数少なく寡黙にしていれば、相手が誰か
区別できなくともばれることは無い、と兄は断言した。

ただ話す時、口調は真似るように、だそうだ。

授業は午前中だけでいいから、と今一納得いかないまま送り出され
た浹は、他にどうしようもなく、兄の学校へと向かったのだった。
そこでは全く疑われなかった。

兄が人に埋もれるように過ごしていたためだろう。

どうして目立たないようにしているのかと尋ねると、人に過度に期待されるのが煩わしいから、とのこと。

いかにも面倒臭がりの兄が考えそうなことだ。

少し考えれば、彼女を自分に仕立て上げる際、あれほどきばきと動いていたのだから、嘘をついていることにも気付きそうなものだったが、余程昂のことがショックだったのだろう。

結果的に兄の病気は仮病だったとわかり、決は少し腹を立てたのだが。

——彼女は人生最大の困惑に襲われていたので、すぐに苛立ちはおさまったのである。

兄の友人、都築和葉に対して、これまで感じたことのない、不可解な感情を抱いていたから——。

「……決」

ちいさな、けれど澄んだ声が耳に届いた。

名を呼ばれて顔をあげると、そこには見慣れた姿がある。

「……礼芽^{アヤメ}……」

淡い栗色の長い髪が、ふわふわと背中^{アヤメ}に掛かっていた。

決を見つめる瞳は琥珀色で、静かな光を湛えている。

「…どうかした？」

美しい顔立ちの少女だが、表情に乏しいせいか、近寄りがたい雰囲気

気があった。

その為によく敬遠されがちな彼女だが、裏での人気は高い。
浹に問い掛ける顔もまた、色が無かった。

けれど、彼女と付き合いの長い浹は、その目に心配そうな翳りがあるのを見つける。

「い、いいえ…礼芽が心配するようなことは…」

「…私、信頼無い？」

「そんなことは——」

「じゃあ話して」

真っすぐな視線に射られて、浹は降参した。

「…わかりました。取り敢えず、場所を変えませんか…？」

「…ん。なら、私の家に来るといい」

こくと頷いて言う友人に、浹は少し目を見張った。

「でも、授業が——」

「いい。たまには休んでも罰はあたらない」

「……わかりました」

この間も休んでしまったがいいか、と諦め。

先程からこの言葉しか口にしていないと思いつつ、浹は友人に従ったのだった。

都内の一等地にそびえ立つ、白亜の洋館。

その一室に、二人の少女は居た。

円形の優美なテーブルを挟んで、猫足のソファに向かい合って腰掛けた姿で、陶器のカップに注がれた香り立つ紅茶を口に運ぶのは、栗色の髪 of 少女——霧崎礼芽。

澁は、琥珀色の液体の表面を、じっと見つめていた。

たった今、前日の出来事を話したばかりだった。

すると友人は何も言わず、無言で紅茶に口をつけたのだ。

不機嫌そうな雰囲気伝わってくる。

カチャリ、とカップをソーサーに置く音を聞いて、澁は顔を上げた。

「…つまり」

温度の無い声音が耳朶を打つ。

「…昂のせいで、そんな奇妙な状況が出来上がったと」

澁ははっと気付いた。

兄と友人が、険悪ではないが仲が良いわけではないということ、すっかり忘れていたのだ——。

「あ、あの、礼芽……」

「——わかった」

「え？」

「昂が蒔いた種だ、あいつに解決させる」

「でも、礼芽——」

「……澁は心配しなくていい」

「あや、」

止めようと口を開いたが、透明で澄んだ友の瞳を見て、言葉が喉の

奥で留まって出なくなつた。

「……………」

黙り込んだ渕に、礼芽の眼差しが和らぐ。

「…喧嘩はしない、大丈夫」

そう言つて、再び礼芽は紅茶を飲んだ。
友人と兄に一抹の不安を覚えながらも、渕は漸く紅茶に手を伸ばしたのだつた。

第三楽章

美貌と優しさ、知性——何もかもを兼ね備えた、彼女達の『姫』は、この所具合がよろしくないらしい。

いつもどこか上の空の『月姫』に対し、彼女を崇拜する少女達からは、心配する声が多く上がっていた。

香月の生徒の中から選ばれた『月姫』には、彼女を護り、慕い、支えようとする、親衛隊なるものが存在する。

その名を『リブラ・アストライア女神の天秤』といい、一般生徒からは略称として『リブラス』と呼ばれている。

香月女子高等学校の全校生徒の半数は、リブラスの構成員となることを望んでいるが、その成員の数は限られており、栄誉に満ちたりブラスを名乗ることが出来るのは、十二名の限られた生徒のみであった。

リブラスの役目は、主人たる『月姫』を護り、支え、その裁きの秤となること。

『月姫』は、別称として『アストライア正義の女神』とも言われることから、親衛隊はその秤とされるのだ。

そんなリブラスが、現『月姫』の少女、宮城浹の様子がおかしいとなれば、その原因を探らないはずがない。

彼女達は特殊な情報網を持っているため、すぐに問題は解決するはずだった——が、何故か今回は、一向に状況が好転しない。……情報が掴めないのだ。

悩んだ末、事態を重く見たリブラスの隊員達は、気の進まない選択を取った。

すなわち、浹の親友——霧崎礼芽に、接触を図ったのである。

十月と太陽の狂騒曲†

〔The third movement〕

「賭けをしないか？」

唐突に、親友と呼んで差し支えない程に仲の良い相手からそう言われ、どうせ大したことではないだろうと、気軽に受けてしまった。――後に、それを大いに後悔するとも知らず。

香月女子高等学校の制服は、白が基調とされている。浹が双子の兄、昴と入れ替わって隣の灯陽高校に行ったのは、五月に入ってすぐのことであつた為に、その時は冬服であつた。

既に一月が経過し、今は六月。衣替えが行われ、生徒達が身に纏うのは、白いワンピース型の制服である。

袖口とスカートの裾に銀糸で細やかな刺繍が施されたそのワンピースの胸元には、小さな三日月と、筆記体の『K』――香月の頭文字だ――が組み合わされた校章が、鮮やかな金糸で縫い取られており、清楚で可憐なイメージを与えることから、近隣の女子学生には人気の高い制服となっていた。

「……………」

『月姫』の元気が無いために、この所困惑した生徒が続出する香月の校門を、怒ったようなむっとした表情でくぐる少女が一人。

デザインが多少凝っているために、香月の夏服を完全に着こなせる人間はあまりいない。

一般の生徒もそれなりに可愛らしく着てはいるが、やはり若干は服に着られている感じが否めないのだ。

違和感の欠片も無く着ることが出来ているのは、それこそ『月姫』たる浹やその友人の礼芽、他数名と限られているのだった。

しかし、たった今門を通過した人物は、驚く程に香月の制服をうまく着こなしていた。

上品な制服が、すらりと伸びた小柄な肢体の魅力を十二分に引き出している。

肩を過ぎる程度の焦げ茶色の髪が白に映え、密集した長い睫毛の下の同色の瞳もまた、人目を引いた。

可愛らしい、という形容詞のよく似合う容姿の少女である。

今は朝の登校時間。

生徒達がそれぞれ学校へやって来ている為に、校門付近は制服の白がまばらに散っていた。

「……まあ、あれは誰？」

「素敵な人……」

「あんな人いたかしら？」

生徒達は囁き合う。

不満げな顔をしてずかずかと校舎へ向かう少女は、彼女達の『月姫』に匹敵する程の容姿を持っていたのだ。

ざわめく人々を残し、渦中の人物は校舎へと消えていく。
ぼうつとしていた少女達は、慌ててその背中を追ったが、その姿はとうに見当たらなかった――。

「くそ、昂め、覚えてろよ……！」

焦げ茶色の髪の美少女はその時、憎々しげに小さくそう吐き捨てて、人気の無い階段を足早に駆け上がっていたのだが……誰も、それに気付く者はいなかった。

東校舎の外側に取り付けられた非常階段は、入り口が施錠されていることもあり、普段滅多に使われることが無い。

そこを、制服のワンピースで、裾が捲れることも構わずに全力で駆け上がる人物の姿は、異様なものがあつた。

「帰ったら首絞めてやる……！」

呪詛のように荒い息の下でそう叫びつつ、足を動かす。鉄柵で覆われた螺旋階段は、足を滑らせたとしても外に転がり落ちる心配は無いが、やはり疲れる。

香月と灯陽の校舎は、似た造りをしていた。

……否、構造的には全く同じだ。その配置が、真逆なだけで。

灯陽の校舎は東側に外階段が設置されているのだ。

ここまで拘り抜かれるともう、天晴れとしか言い様が無いが、方角的に香月は西に、灯陽は東にある。

地図上で考えると、灯陽の東階段を登って灯陽の屋上から香月の屋上を通り、たった今少女が駆け上がっている香月の西階段を下るように辿る形は、東から昇って西に沈むのを暗示しているかの如く、太陽と月の軌道に沿っているのだ。

対称ということを考えれば、どちらの生徒も互いの校舎の位置を把

握するのは簡単で、双子のような校舎は時折生徒達の話題となる。

「くそつたれ！」

外見にそぐわぬ粗暴な台詞を吐いた瞬間、少女の足は屋上に到達した。

張り巡らされたフェンスの一部は外階段と繋がっており、開くようになっていく。

当然、ここにも施錠が為されていたが、何故かダイヤル式のその番号は、ある男により教えられていたので、簡単に開錠出来た。

「…昂って、何者…」

思えば階段の入り口にある扉には鍵が必要だったが、合鍵を手渡された為に侵入が可能だった。

女子校の階段の鍵だなんて物を所有している男の不可解さに思わず怒りを忘れて呆れたが、自分の格好を思い返して怒りが再燃した。

「くっそー！」

苛立ちに任せて、フェンスを蹴り開ける。

ガシャン、と音を立てて開いたフェンスの向こう側に立った瞬間、少女は固まった。

何故なら、顔を上げた先に、一人の女生徒が佇んでいたのだ――。向こうも、突然の闖入者に瞬きを繰り返している。

二人は、お互いに固まってしまったのだった……。

(2)

賭けをしないか？そう、友人の宮城昴に言われて、突然何を言う、と驚いたが、

「……別にいいけど？」

と、よく考えもせず頷いてしまった。

こんな結果になるのだったら、頷かなければよかったと、都築和葉は今思う。

賭けの内容は簡単。

昴が賭けを持ち出した翌日に行われた小テストで、より点数が良かった方が勝ち、というものだった。

難しいと評判のものだったが、和葉はその教科——数学が割と得意。対する昴は、いつも平均点を少し上回る程度しか取っていなかった。為に、和葉は、自分の敗けはないだろうと高をくくっていた。

その結果……都築和葉、九十七点。宮城昴——百点……つまり、満点。

そんな結果になるとは全く予想していなかった和葉は、愕然とした。そして、言い渡された罰は——。

屋上のフェンスに寄り掛かり、浹は空を仰いでいた。
青い空を眺めながら、物思いに耽る。

この頃、心配そうに声を掛けてくる人間が頓に多い。

心配をかけていることを申し訳なく感じるが、決の心は一向に安らがなかった。

HRの始まる前のこの時間、教室にいるのも息が詰まる気がして、こうして屋上に出てきてしまったのだ。

予想通り、他に人はいなかった。

白いフェンスに身体を預け、考えるのは、一人の少年のこと。何故こんなにも気になるのだろうか、とあれから何度も考えた。

あんなに真っ直ぐな目をした人は初めてだったかもしれない、というのが一番大きい。

だがやはり、よくわからなかった。

「……もう一度、会えたら……」

再び顔を合わせたら、この感情の理由がわかるだろうか。

そうして一人、悩んでいた時だった。

封鎖されているはずの外階段から、人が現れたのは――。

さらりと流れる艶やかな黒髪に、涼やかな漆黒の瞳。

今まで見てきた人間の中で、一番美しいと断言できる美貌の少女だった。

ふと、誰かに似ているような気がしたが、こんな美人の知り合いはいない。

昂にこの時間帯なら誰もいないと言われたからこそ、無造作に屋上へ入ってきたのだ。

故に、人がいたことに驚いて硬直してしまったが、同時に相手に見

惚れてもいた。

じつ、と綺麗な黒瞳に見られていることに気付き、我に返る。

「あつ、あの、えーつと……」

外階段からやって来たこと、あの粗野な開け方をどう誤魔化せばよいのかわからない。

何もかも宮城昴のせいだと、内心で悪態をついた。

賭けの罰則は、『女装をして香月の屋上へ行き、灯陽側に面したフエンスに、校章入りのハンカチを結び付けてくること』――。

つまりその時、宮城浹と対面した「少女」は、浹の兄である昴の親友……都築和葉なのであった。

そうと知らなければどう見ても、完璧な美少女である。

人がいたとしても、冷静に対処できればよいのだが、生憎彼にはそういう能力が欠如していた。

しどろもどろに相手が口を開いた瞬間、浹は相手が誰であることを察した。

長い髪の下にある顔も、その声も、間違いなく――『彼』のもの。

もう一度、会いたいと思っていた相手のものだった。

思わず見入ってしまったが、すぐに違和感に気付く。

相手の出で立ちが、明らかにおかしい。

非常に可愛いし、異常な程に似合っているが、それは香月の制服――すなわち、『女子』の制服だ。

……目の前にいる人は、『男』のはず。

それに何故、隣の灯陽ではなく、香月にいるのか。

疑問は尽きなかったが、顔が怪訝そうになるのを自制して、泷は相手に……都築和葉に声を掛けた。

無意識に、微笑みを浮かべて。

「——こんにちは」

「あ、こ、こんにちは！」

泷の挨拶に、反射的に和葉は大きな返事を返してきた。

直後に、失敗した、とでもいうような顔をする。

声が大きすぎたとも思っているのだろう。

あまりにわかりやすい態度に、泷はつい、くすりと笑ってしまったのだった。

第四楽章

「……………何の用？」

静かに口を開いた相手に、少女達は少し怯んだ。

それ程、琥珀の瞳に浮かぶ静謐な光は、犯しがたい神秘的な美しさを誇っていた。

地毛ながらにゆるく巻かれた栗色の髪は淡く輝いている。睫毛は長く、唇は桜色。肌が白磁のように白いことも、まるで高級な西洋人形を思わせた。

リブラス——親衛隊の少女達が讃える『姫』と並ばせても、系統は違うが、何ら劣らぬ美貌を『月姫』である宮城浹の親友、霧崎礼芽は持っていたのだ。

呼び出したのは朝方の中庭。顔を出した太陽に僅かに照らされた美貌はどこか危うい程に美しく、思わず、親衛隊の幹部の数人すら見入ってしまった。

何とか自分を保っていた数名——隊長、副隊長その他——の内、一人が口を開く。

「霧崎様に、折り入ってお話が。この所——」

「……………浹のことなら、心配無い」

言葉を遮られて、少女達は一瞬ぽかんとした。

「はい……………」

「もう、手は打ってある。その内元氣も戻るから——何もしなくて

いい」

折角の意を決した呼び出しだったが、直ぐ様その時間は終わりを告げた。

尋ねる前にもう、霧崎礼芽は答えを発したのだ。

それは納得のいくものではなかったが――。

「……決様がお元気になられるなら、私達は身を引きましょう」

リブラスの隊長は静かに言葉を発する。

礼芽から、これ以上の情報は手に入らないということが何となくわかった。

故に、一度は引く。

しかし――

「ですが、一週間が限度です。それ以上を過ぎても決様のご様子が良くおなりにならないければ……」

伊達に、女神の僕を名乗っているわけではない。

「どんな手段を講じてでも、原因を突き止めさせて頂きます」

礼芽は、隊員達の決意のこもった目をちらりと見て、目を細めた。

「……好きにするといい」

〔The fourth movement〕

ことあるごとに、脳裏に蘇る面影がある。

鴉の濡れ羽色、とはおそらくあんな色を指すのだろう。長く艶やかな黒髪と、綺麗な黒瞳を持つ美しい少女の笑顔が、頭から離れない。ぽーっと自分の世界に旅立っている間に、何度も声を掛けられていたらしい。

「……ずは、かずは！」

「う、はい！」

びくつと反応すると、目の前には呆れたような友人の姿。

「……またどこかに意識が飛んでたな」

「——悪い……」

謝って顔を上げれば、正面でこれみよがしに溜め息を吐いてくる昂の髪が目についた。
黒い髪。

——なんだか、色合いが『彼女』と似ている気がする。

前髪を伸ばしていて、眼鏡の奥に隠れている為に、今はその瞳はよく見えないが——

「……黒……」

以前見たことのある友人の目は、髪と同じ黒だった。

……そこまで考えて、和葉は首を振る。考えすぎだ、と。

大抵の日本人は黒髪黒瞳である。まあ自分は違うが、クラスメートの八割は黒髪だった。黒といっても色々あるが、色合いが似ているからとそこからまたある少女を連想してしまうなど、どうも過剰になりすぎているようだ。

何故こんなにもあの少女が気になるのか、と内心でため息を吐くと、昴が話し掛けてきたので、漸く意識を切り替えようとした。

「で、いい加減教えてくれてもいいだろう？何があったんだ？」

「…別に。ばったり生徒と遭遇して、男だつてばれるかとひやひやだったけど、何とか無事に仕事を終えてきただけだつて何度も言ってるだろ」

昴の質問で嫌でも記憶が蘇ってきたので、和葉はむつとする。

同時に、真実を全て語っていないことに罪悪感を覚えた。

あの日、和葉は、男であることがばれたのだ――。

「…浹。元気になった？」

静かに確認のように問われ、宮城浹は申し訳なさそうに微笑んだ。

「ええ、心配をかけてごめんなさい…」

「…原因は、わかった？」

琥珀の双眸を見返し、そこから読み取ったことに、浹は苦笑した。

「——礼芽は私より先に、私の気持ちに気付いていたんですね？」
「……………」

沈黙は、肯定の証。

「どうやら、私は恋というものをしてしまったみたいです……………」

胸の奥で燦っていた想いの正体を、昨日、漸く知った。

宮城浹は、都築和葉に恋愛感情を抱いているのだ——。

どうして彼を好きになったのかと聞かれ、浹は答えた。

あの真っ直ぐな瞳に、その心の持ち様に、惹かれてやまないのだと……。

いつも無表情な友は、顔色を変えずにふうん、と一つ頷いただけだったが、その瞳に柔らかな色を浮かべてくれたから、浹の心も和らいだ。

生徒の大半に衝撃を与えること間違いなしの浹の恋する乙女的宣言は、彼女達が、人のいない屋上で話していた為に、幸いにも他の人間に聞かれることはなかった。

(2)

香月の屋上は、一般生徒には公開されていない。

常に施錠されているその鍵を宮城浹が所有している理由は、彼女が『月姫』という立場にあるからに他ならなかった。

『月姫』は、名実共に香月の頂点に立つ者である。英知を持ち、器量に優れ、指導力溢れる者が選ばれる。

つまり、『月姫』とは生徒の代表格——生徒会長でもあるのだ。

都築和葉が香月の屋上に現れた時、浹の他に人がいなかった理由はそこにある。

「ここは一般生徒は立ち入り禁止のはずだけれど……生徒会のどなたかのお知り合いかしら？」

小首を傾げた浹に対し、和葉はざあつと音を立てたように顔を悪くした。

内心で、知っていたに違いない友人に罵詈雑言を並べ立てる。

(昂うー!!！)

今頃、彼は含み笑いしているかもしれない。

ぎりぎりと言を握りながら——和葉という少年は、見た目に反してかなりアグレッシブな性格である——如何にして危機を乗り越えるかと焦っていると、手にしていたものが相手の目に留まったらしい。

「あら…そのハンカチ…」

「！あ…これは…っ」

慌てて手を後ろに回す。

怪しげな行動だと思われただろうが、仕方ない。

何しろこれは、

「…灯陽の校章…」

ぽつりと少女が呟いて、和葉は目を見開いた。

見た目は自分でも女にしか見えないと落ち込んだ女装だが、態度や癖は男のもの。男子校のハンカチなんて持っているのがわかれば、疑われるのではないか――。

「…どうやって入手なさったのかは知りませんが、随分と古いおまじないをご存知ですね」

「…え？」

渕は柔和な笑みを浮かべて、訥々と語る。

どこかその笑顔が、哀しそうに見えた。

（…なんだ…？）

胸を、何か分からぬ思いが過る。

首を捻りかけた和葉を他所に、渕はただ言葉を紡いだ。

「校舎の屋上のフェンスに灯陽のハンカチを結びつけると恋が実る――生徒会が屋上を管理するまで、時折行われていた恋のおまじないでしょう？」

「……!？」

そんな馬鹿な。

和葉は顔を真っ赤にして、思わず首をぶんぶん横に振っていた。淡は、目を瞬かせる。

「あの…？」

「こ、これは人に頼まれただけで、お…私がしたかったわけじゃ…！」

俺、と言いかけて慌てた。

もう何だか本当に恥ずかしくて、思考がとびかけている。危ない危ない。

「…そう、ですか…」

どことなく温もりのある声に相手を見遣れば、見惚れる程に可愛い笑みが浮かんでいた。

——衝撃だった。よくわからないけれど、心臓の鼓動が高鳴る。

友人達から情緒に欠ける、超鈍感と呆れられているとも知らぬ彼は、それが何の芽生えであるか気付かなかったのだ。

「本当はいけないことですけど」と悪戯っぽく笑った少女は、フェンスにハンカチを結ぶことを許可してくれた。ただし、明日には外してしまうと条件を付けて。

取り敢えず目的は果たしたのだからいいだろう、そう思って、ハンカチを結んだ和葉は、挙動不審なまま屋上を後にしようとして——ドアが閉じる前に聞こえた言葉に、ぎよっとした。

「誰にもいいませんが、もう別の学校に忍び込まない方がいいですよ。ここの生徒は目立つ人間を把握してますから。隣だと、バレ

た時が大変でしょう？…ごきげんよう、都筑さん」

振り返る間も無くドアは締まり、鍵も掛けられ——他に人が来そうな気配を感じて、和葉は急いで逃亡したのだった。

正体がバレたことと、彼女を思うと何故か気分が高揚することを黙ったまま、和葉は原因たる昴を締め上げたのだが、友人は悪い悪いというばかりで反省の色が見られなかった。

やれやれ、そう思いながら、自分の不思議な感情を持て余す。

何なんだろう…そう、和葉は呟いた。

そう言えば、彼女の名前を知らないままだ——そんな物思いに耽り、どこか遠くへ意識を飛ばした彼へ、友人がにやりと笑みを浮かべて観察していたことに、当人を含め誰も気付かなかった。

同じ頃、同じ記憶を思い出していた少女は、初めての恋に胸を焦がす。

女子高に忍び込んでまで叶えたい恋が彼にはあるのかと思った時、ひどく胸が痛んだ。悲しい、と泣く自分がいた。

それが次の瞬間に掻き消えた時の喜び——。

自覚した悲哀と、そうでないと知った時の歓喜。

それが恋に落ちたことだと、わかってしまった。

何故、と言われても多分説明できない。答えられない、理屈では語れない——だからこそそれは恋であるのだと、昔何かの本で読んだ覚えがある。

礼芽に話したことは彼を好ましく思う理由の一つで、十分な説明は出来なかった。

理屈では語れない、それが正しければ自分にも当てはまる。言い得

て妙とはこのことか、と浹はただ納得するのみだった。
常に無く気持ちがふわふわしているらしい彼女を見て、礼芽は無表
情の中に少しだけ、笑みを浮かべた。

第五章

この所憂いを見せていた貴人は、どうやらひとまず元気を取り戻したらしい。

それはこの週から、かの少女が常よりも忙しく立ち回らねばならなくなっただけとも原因なのだろうが、リブラスの面々は一応、ほっと胸を撫で下ろしたのだった。

一週間、と霧崎礼芽に言い置いた親衛隊達は、三日と置かぬ内に浹が調子を取り戻したことでますます、一体何があつたのだろうかと言つたが、敬愛する人物が多忙の中にいては、彼女の支援が第一と、ごく水面下で調査を続けるのみで、親衛隊としての素晴らしい働きを見せることになる。

季節は夏——七月に入つてすぐに行われる期末考査の直前たる六月下旬に、香月女子高等学校では体育祭が催される。

進学校であり生徒の約半数がどこかの令嬢であるという私立の名のある高校にしては、その活動は極めて異例な程に精力的であつた。観客は特別な招待券を有するか生徒の家族しか受け入れられないのだが、客などいなくとも、各学年でトップに立つたクラスへの褒美、また優勝した団への褒美が通常考えられない程に豪華であるために生徒は一丸となって体育祭という行事に取り組むのだ。

同日に、隣では灯陽の体育祭が行われる。両校においてある種目だけが共通して行われ、それによる結果の勝敗を競つてきたという伝統もあるために、一層生徒達は盛り上がりを見せていた。

去年は灯陽に勝ちを持って行かれた。今年は香月の番だ——というわけである。

香月の場合は、ひおうぎ緋桜祭。

灯陽は——そうがさい蒼牙祭という名で、それぞれの体育祭は呼ばれていた。そんな中、香月の生徒会長である宮城浹は、当然ながら、様々な業務に追われる時期となるのだった。

十月と太陽の狂騒曲†

~The fifth movement~

「……おい、か・ず・はちゃん」

「……」
「駄目だこりゃ……おい昂ー。こいつどうしちゃったんだ？最近。禁句言っても反応しねーし」

女の子のようだからかわれることを何より嫌うはずなのに。
目の前で手を振ってみても、ぼんやりと考え込んだまま、少女のよう
に可愛らしい少年はぴくりとも動かない。

「——ああ、ほつといていい。競技は俺が勝手に推薦しておく」
「そーかあ？じゃあよろしくー」

ひらりと手を振ってその場を離れた級友に頷くと、昂はにやりと笑
みを浮かべた。

そしてその後、HR終了のベルが鳴り響いた後。
こっそりと和葉に近付いた昴は、その耳元に口を寄せ、ぼそりと囁いた。

「…宮城浹」

「えっ!？」

びくり、と跳ねた友の様子に、くつと笑みがこみ上げた。

「す、昴…?」

「この間、和葉ちゃんが屋上で話してた相手だよ。誰だったのか気になってたんだろ?」

「お、おま、なん…っ!？」

ぱくぱくと金魚のように口を開閉させる友に、笑みを崩さぬまま、昴はけろつと白状する。

「ここの屋上からこっそり双眼鏡で覗いてたから」

「……お前なあ……」

げんなりした様子で和葉は溜め息を吐いたが、昴は飄々と、心配だったからと囁いた。

「——昴、あの子のこと知ってるのか?」

もういいと諦めて問えば、あっさりと宮城昴は言った。

「知ってるも何も、妹だ」

「はあああ!？」

涼しげに落とされた爆弾に対して、和葉は絶叫する。
そして暫く、信じがたい事実に硬直してしまうのだった。

(2)

宮城昂という人間は変わっていると思う。

長く伸ばした前髪と厚みのある眼鏡で顔の半分程は常に隠れているし、俯きがちだからその顔をしっかりと見たことがある人間は少ないだろう。

入学当初はその顔を見たがる人間も多かったが、火傷の痕が……などと辛そうに言っていたら同情こそすれ面白がるような馬鹿はいなくなつた。勿論、それが嘘だとは親しい人間なら皆知っていることだが。

見た目こそ地味だが、昂は中々に人づきあいが良く、交流関係が広くてそこそこに成績も良い。

そんな彼は気に入つた人間を時折弄り倒したくなるらしく、和葉はよくその被害者になっていた。今の流行りで言うなら間違いなく昂はサデイスティックな人間である。

そんな、端的に言うなれば普通の一般市民と言つた昂が、才色兼備の香月の月姫と名高い宮城浹の兄だなんて——とても信じられなかった。

だがしかし、そんなくだらない嘘を吐くような人間ではないことなど承知している。

「苗字一緒だろ？年のことなら、俺達は双子だからな」

「な、なんで皆、それを知らないんだ……？」

「情報というものは、しかるべき処置をすれば漏れないものなのだよ、和葉くん」

それに、と昂は笑つた。

この学校には、高校以前の知り合いが一人もいない上に、これだけ

共通点がなければ誰も疑わないだろう？ と。

前髪の隙間から僅かに見えた顔が、どことなくあの少女に似ていたような気がしたのは、気のせいだろうか。

啞然とする和葉へ、昴はにやにやと笑いながら言った。

「この頃、どうも注意散漫のようだが——自分でもその原因がわかってないだろ？ 協力してやろうか」

それが何を意味するのかわからなかったが、この所日常生活においても、確かにぼーっとしている。しっかりしなくてはと思っていた所だ。

悪魔の囁きのように聞こえるが……まあ、悪いようにはきつとしないだろう。

自分でも原因のわからないこの状態が治るならと、和葉は頷いた。その結果——。

「じゃ、お前『例の競技』に出場するって言うておいたから」

「……は？」

頑張ってね、と笑う口元。

一瞬、何を言われたのかわからなかった和葉は、相手の言葉を理解した瞬間、絶叫していた。

「はあああああああ！？」

気付けば黒板には、いつのまにか、ある競技の種目名と、自分の名前が書かれていた。

先刻の和葉がぼーっとしていたHRで、体育祭の競技決めが行われていたのだが、彼は聴いていなかったなので、勝手に昴が推薦して、決定してしまったのだ。

徒競争やらリレーやら、五つも自分の名前がある。

いや、たくさんの種目に出なければならぬことはまだいいけれど、ある競技だけは問題だった。

それは、あまりの内容と重圧感に、誰もが避けるもの。

「昂——！！！」

和葉は、悲鳴のように友人の名を叫び、その襟首を掴んで揺さぶった。

昂はされるがまま、余裕の笑みを見せる。

半狂乱になった和葉を級友達が取り押さえ、皆一様に、あきらめろと声を掛け——変えられない事実、和葉は暫く沈み込むのだった。その時にはもう、すっかり先ほどの衝撃的な告白は頭から抜けていた。

「あ、あの、決様！」

会議の後、教室へと戻る道すがら、数人の女生徒に声を掛けられた決は、歩みを止めた。

にこりと笑みを浮かべると、小首を傾げる。

「どうかしましたか？」

「あの、今年も演舞には参加なさるんですよね！？」

顔を赤くしながら問いかけられて、緊張しているのかなと思いが

ら、浹は安心させるように優しく相槌を打ち、苦笑した。

「ええ、推薦を受けてしまいましたわ」

きやあつと上がる歓声。

生徒が互いに敬語を使い合う姿は、香月特有の姿だった。規則というわけでもないのだが、「お嬢様」という人種が多いので、一般家庭の生徒もそれに慣れようとして砕けた敬語を使っている傾向にある。

特に一般生徒にとって、月姫は憧れの存在だ。彼女達は、ごく普通の家庭の子達だと記憶している。ほんの少し無理をした敬語がなんだか微笑ましい。

少女達は嬉しそうに、浹に言った。

「頑張ってくださいね！ 生徒会もお忙しいでしょうけど、浹様の演舞を楽しみにしてます！」

ありがとう、と礼を述べて、言葉を交わしたことで嬉しそうな少女達と別れる。

廊下を歩きながら、隣にいた礼芽が、ぼそりと呟いた。

「…浹は、話し方が三つある…」

「え？」

「社交関係では良家の子らしい敬語、気を許した相手には砕けた敬語……あまり好まない相手には、慇懃無礼な敬語だ」

「そ、そうですか…？」

自分では口調のことを理解していないようだ。

浹は育った環境が特殊だったせいで、敬語でない話し方ができない。仕方のないことだとはわかるけれど、とても小さな頃は、敬語なん

てあまり使っていなかったのにな、と礼芽は時折思うのだ。

それでも自分と話している時は、時々少しだけ、敬語が抜けることがある。

それは心を許している証拠だと知った時、とても嬉しくなったのを覚えていた。

首を捻る友人へ、礼芽は首を振る。

「気にしないでいい。ただ思ったただけだから」

「はい。でも、気付きませんでした——学校の方と接する時は、ついつい見栄を張ってしまうのかもしれないね」

「……浹は、周りの望みを叶えようとするから」

ぼそり、と小さく呟いた言葉は聞こえなかったらしい。

何ですか？ と問われたけれど、何でもないと再び頭を横に振った。宮城浹という少女は、周囲の期待に応えよう応えようと、無意識の内に頑張る傾向にある。

それがいつか彼女を押しつぶしはしないかと、霧崎礼芽は密かに危惧していた。

「——浹、演舞の練習の時は言って。代わりに執務をする」

「え、でも、礼芽も忙しいのに——」

「そのための『星』だ。私の役目を取り上げる気か？」

「……いいえ。よろしく願います」

緋桜祭では、数人の選ばれた生徒による『月舞い』という演舞の種目がある。

点数を競い合うだけでなく、純粹な鑑賞のための競技もあるだろうとする初代の生徒会が作ったものであるらしいが、その練習にもかなりの時間が必要する。

ただでさえ忙しい浹は、放っておくと一人でどこまでも無理をする

のでと礼芽は釘を刺したわけだった。

霧崎礼芽もまた、香月女子高等学校の生徒会の一員。会長たる『月姫』を支える生徒会の役員は、月に対して星と言われるが、特にその中でも、第二の地位にある副会長は、『星華』ほしはなと呼ばれる、陰の実力者が就くもので。礼芽はその名を冠する者だった。

しぶしぶながらに仕事を分担することに頷いた澁を見ながら、礼芽はふと思った。

彼女は今、生まれて初めて恋をしているという。

願わくば、その相手が、決して良い影響を与えてはくれないだろうか、と。

礼芽の調査によれば、その少年に対する判断は保留、といった所なのだが。

宮城昂という男が、妹に何の益もたらさないような人間を恋人候補に選ぶはずがない。

もしかしたら、何かが変わるのではないだろうか、そう思った。

第六楽章

青く晴れた空にはいくつか白い雲が漂うものの、十分に快晴と言えるもの。

雨雲の気配はなく、眩しい太陽の下に、たくさんの真新しいテントが並んでいた。

多くの人が高揚した心地で、一心に一つの場所を見つめる。

広い校庭の一面に置かれた木製の壇上に、一人の人物が立つ。

すでに設置されていたマイクへ向けて、凜とした声が発せられた。

「皆さん、一月の間練習に励んで来られた様子をずっと拝見してきました。その成果を十二分に発揮され、互いに尊重し合いながら、全力を持って競技に臨まれますことを期待しています。……この晴れた佳き日に、伝統ある行事を無事開催できる喜びと共に——ここに、香月女子高等学校体育祭、第四十八回緋桜祭の開始を宣言致します」

沸き上がる歓声。

それは、決して聞き苦しいものではなかったが、香月では珍しい程に熱に満ちたものだった。

時を同じくして、隣校からも大きな歓声が上がる。

蒼牙祭が始まったのだ。

——香月と灯陽、両校の一大行事たる体育祭は、こうして始まった。

十月と太陽の狂騒曲†

〔The sixth movement〕

「…暑い…」

真夏ではないだけマシなのだろうが、やはりじんわりと熱が染みしてくるような暑さだ。

思わずそう呟いた和葉は、いきなり頭に重力が掛かって、驚きの声を上げた。

「うわっ！」

「かーずはちゃーん。開始早々暑さに負けてんなよ？お前たくさん出場するんだからさ」

「……勝手に俺に色んな競技押しつけたのはお前らだろうが！」

「聞いてないお前が悪い。俺はちゃんと何度も確認したぜ？ 推薦されてるけどいいのかって。返事がなかったから決まったんだよ」

涼しい顔で笑う相手は、和葉のクラスの学級委員だ。

澄んだ焦茶色の瞳は細い黒縁眼鏡の向こう側で笑っている。仄かな茶色の混じった髪色は襟足が少し長く、暑いのか結んであった。切れと何度も言っているが散髪に行くのが面倒だとかなんとか……飄々とした所が少し昂と通じるものがあると思いつつ、こちらはもつと人懐っこい。

「それにこーんな可憐な外見なのに、運動神経いいんだもんなあ、和葉姫。そりゃ皆から期待されるわ」

「可憐とか姫って言うな！！　っていうか重い！　どけよ！！」

精一杯不機嫌そうに怒鳴り、のし掛かっていた身体を払いのけた和葉だが、どうも迫力が足りず、傍目には子犬が唸っているようなものとして映り、微笑ましい視線をもらっているとは本人は知る由もない。

香月と灯陽は、若干色調が違うものの、同じ型の運動服を使用している。伸縮性や通気性などに優れたそれなりに有名なブランドものらしいのだけれど、白を基調にしたそれと黒を基調にしたそれはぱっと見、普通のジャージのようで、他校と大差はない。

夏の間、上衣は半袖のトレーニングシャツを使用するために、制服程に一線を画した雰囲気を感じさせないように認識される格好だった。

「…佐原^{サハラ}。和葉も、次はお前ら出番だろ？」

ふと声が掛かって、不機嫌そうにしていた和葉ははっと振り向いた。

「やべ、もう始まる時間か！ サンキュー昂！」

「おー、姫に構ってて忘れる所だったぜ、ありがとさん」

姫じゃねえ！ と再び和葉は唸りながらも、それを宥めつつ生温い笑みを浮かべる学級委員——佐原祐^{タスク}を連れて控えのテントを離れた。やれやれと言いたげに肩を竦めて、昂は二人を見送る。そして、やや視線をずらし、隣校へ何やら思慮深げな表情を向けたがそれもすぐに終わり、クラスメイト達との歓談に入ってしまったのだった。

和葉が出場する最初の種目は、ポピュラーな二百メートル競走。同時走者には運動部のそうそうたるメンバーが居並んでいるが、灯陽ではハンデなんてものはない。

生徒が出場する種目を選ぶのだから、全員が全力で頑張れ、という

訳である。

第三組の少年達の中でもやや背丈が低く少女のように愛らしい和葉は、見た目からすれば不利極まりない様子だったが、彼の姿が見えた途端、あちこちから歓声が上がった。

「姫ー！！」

「和葉ファイトー！」

「おい誰だ今姫って言った奴ー！！」

思わずがう、と生徒の集団に噛み付くが、笑いが起こるだけで気圧される人間なんていやしない。

不満そうにややぶすくれつつ、和葉はスタートラインに着いた。スターター係がピストルを掛け声と共にピストルを構える。クラウチングスタートの体勢で合図を待つ人々。

——やがて甲高い音が鳴った時、少年達は一斉に走り始めた。

(2)

「――浹様、お客様です」

生徒会役員の一人のその呼びかけに、浹は書類に判を押していた手を止めた。

多忙な浹に代わり、副会長によってきつちりとまとめられてはいるものの、どうしても生徒会長にしか処理が許されていない仕事がこの所溜まっていたので、少しばかり空き時間ができていた今、盛り上がりを見せる競技を本部席から観戦しつつ本来の業務をこなしていた所だったのだ。

「どちら様かしら？」

振り返った彼女の目に映ったのは、小さなレディだった。

「ごきげんよう、あまねお姉さま」

見た目五歳程の幼い少女は、しかしきつちりと優雅な挨拶を取って見せた。

「まあ…なつき 凧月さん」

その少女の名は、おつじ 桜路凧月と言った。

さらさらと背に流れるような黒髪に琥珀色の大きな瞳の、将来をとても楽しみにできる実に整った顔立ちをしている。

にこつと微笑んだ風月は、とことこと決の元までやってくると、一通の封筒を差し出した。

何かしら、と首を傾げる決に、風月は悪戯っぽく微笑み、見てのお楽しみと答える。

「おひとりでごらんになつてね、私からのおくりものです」と楽しみに語ると、お姉さまの演舞、楽しみにしてますとだけ言い置いて、あつと言う間に観覧席の方へ行ってしまった。

あの少女とは、家族ぐるみで仲が良い。香月は同じ系列で少し離れた地に幼稚園も経営している。あの幼い少女は裕福な家の子どもで、その幼稚園舎に通っているために、割合簡単に緋桜祭の招待券を手に入れることができたのだろう。

来ているとは知らなかった。

期待されるのは何だかくすぐつたい、そう思いながら、役員がいない隙を見て、封を切り――中から出てきた数枚の写真に、目を見張った。

『どうだ、惚れ直したか?』と茶化すようなメモ書きが添えてある。見間違えようもなく、その字は双子の兄のものだった。

どうやら風月はあの兄から招待券を得て、代わりにメッセンジャーの真似ごとをさせられたらしい。

灯陽の競技の様子は、とある事情から逐一こちらまで入ってくるようになっていた。

つい三十分程前の出来事だったはずだが――。

「あの人は何やってるんですか……」

三枚の写真は全て、一人の人物に焦点が当てられている。

聞いていた、最初の競技で運動部と張り合い、一人の運動部員と同着で一位を取ったのだと。

ゴールテープを切った瞬間の零れるような笑顔、仲間にいじられ拗

ねたようにしている顔、おそらくカメラに気付いたのだろう、こちらを向いて、怒っている表情。

そのどれも、映っているのは、彼女が初めて恋をした相手……都築和葉だった。

ある意味隠し撮りということとはわかってはいるけれど、後ろめたさを感じつつ、つい浹はそれを宝物にしようと決めてしまった。

（ごめんなさい、和葉さん。もう二度とこんなことしないように言っておきますから……）

好きな人の写真を一枚くらい、欲しかったのだ。

本来ならば処分してしかるべきだろうが、昴は浹にそんなことができないと踏んでの行動だったに違いない。

家に帰ったらすっかりお灸を据えておかなければ、と浹は兄への仕返しを誓ったのだった。

「……昴兄」

まだ変声期前の少年の声。

口元に笑みを浮かべながら振り向いた昴は、予想通りの人物を認めて軽く手をあげた。

「お疲れ、匠^{たくみ}。首尾は上々かな？」

「……凧月はもう届けた」

そう言いながら、小学生低学年位のその少年は、呆れを滲ませた声

で昂に言う。

「……あんまりいじると、また霧咲さんに怒られるよ」

「大丈夫大丈夫。浹の嫌がることはしてないだろ？」

「……浹姉も可哀そうに……」

はあ、と嘆息する少年の名は桜路匠といい、浹に昂からの手紙を渡した少女の兄だ。こちらもまた、まっすぐな黒髪に黒い瞳と非常に整った顔立ちをしている。周りの女子が放っておかないだろう。ちなみに彼は小学三年生、家の方針で近くの公立小学校に通っている。やれやれと言いたげな態度で、昂の手に何かを渡す。

それを見て笑うと、昂は礼を述べて匠を解放した。

そしてその後、嬉々として和葉に近づくと、こう囁いたのだった。三種目以上一位を取ったら、いいものをやるよ、と――。

それにつられたわけではないが、続く二つの競技でも一位に輝いてしまった和葉は、にやにや笑う昂から、嫌な予感を感じつつも、一通の封筒をもらう。

そして、少女のように可愛らしい顔立ちの少年は、中を改めた瞬間、真っ赤になってその場から走り去ったのだった。

中身が何であつたかは、言うまでもない。

(3)

……これは一体、何の冗談だろうか。

硬直している少年の背に、マイク越しの声が届いた。

『おおっと、一位を独走していた我が校のアイドルの足が止まった――！ 一体何を引き当てたのか！？』

「誰がアイドルだ――！」

昼休憩を挟んで、午後の最初の種目だった。

これが終われば、後は物凄く気が乗らない種目に出て、彼の出番は終わりのはずだった。

ご褒美だと渡された封筒の中に、たおやかに微笑む黒髪の美少女を見た途端、動悸が激しくなって、相手にそれを押し返して逃げた昼前。

水道の水を頭に被り、必死で気持ちを落ち着けたはずだったのに――何故世の中にはこれ程までに、心を乱すことが多いのか。

実は放送部員でもあり、午後からの実況を担当している佐原祐の言葉に怒鳴り返し、和葉は手にした紙片を握り潰しながら肩を落とす。スタートの合図が鳴ってから、平均台を楽々渡り、網を素早く潜り抜け、人工の山を飛び降りて此処まで来た。

所謂障害物競争というその種目の最難関、係員が持っている数本の白と青のスランテープの中から、青い一本を選び取り、引っ張った先には袋に入ったアンパンが括りつけられていた。

アンパンは割と好きなので喜んで一気に食すと、係員が持っていたテープの反対側を渡された。そこにはホッチキスで折りたたまれた紙片が留めてあって、その中にとある指令が書かれているのだ。

この障害物競争の最後にして最大の目玉、それはくじによるパン食

い競争後の仮装レースだった。

本人の運が試される中、和葉が引いたのは、何と。

「嘘だろ……!？」

「姫ー！ 早くしないと追い抜かれるぞ！」

すぐ側に設えられた簡易な試着室。その中に、和葉の次に来た人物は顔を引き攣らせながらも飛び込んで行った。このままでは出遅れる。

既に迫りつつある他の選手の気配を察知して、和葉は心底嫌そうな顔をしながら、試着室へと入って行った。

数分後、その中から現れたのは――。

『皆の衆！ 見よ、美少女アリスのお出ましだー!!』

「美少女って言うなーっ!!」

怒りの声は、大衆の雄たけびに似た歓声に掻き消された。

恥辱に顔を真っ赤にしながら、ジャージの上から簡素な造りの青いワンピースに白いエプロンを被った金髪の「アリス」は、何故か持たされた白い兎のぬいぐるみを振り回しながら、ゴールへ向かって突き進む。

その死に物狂いの様子、前に出た奴は呪い殺すと言わんばかりの恐ろしい雰囲気、選手達は気圧され、結局金髪アリスが一位を飾った。

ゴールテープを切った瞬間、脱兎の如く試着室へ駆け戻り、衣装を全て投げ捨てた和葉は、たいそうお怒りだった。

「いや、お前って本当、人の期待を裏切らないな」

「……ああ!？」

応援席へ戻り、不機嫌そうにどかつと腰を下ろした和葉は、くくつと笑った昴へドスの効いた声を返すが、軽く肩を竦められただけ。

「まあまあ、他にも色モノはたくさんあるんだ、マシな方だっただろ」

見れば、和葉の次走者には、明らかに体育会系、といった男子がセーラー服を着ていたり、よくわからない重そうな緑色の物体のきぐるみを着て必死に歩いている姿が見られた。

「……まあ……」

「あの緑の、キュウリだと思うな。ちなみに裏情報だと総重量二十キロの明太子きぐるみもあるとか。…そっちがよかったか？」

「………イヤだ……」

誰がどこから調達してくるのやら。ちなみに和葉が着たアリスは実行委員の手縫いだとか。何やってるんだ。

「なあ、和葉。決の写真はお気に召さなかったか？」

「ばっ…ぐ、げげほっ！」

蒼牙祭実行委員に呆れながら、常備してあるスポーツドリンクに口をつけた瞬間、忘れかけていた問題をむしかえされて、和葉は咳込んだ。

「馬鹿！ なんつー時に…！」

「悪い、狙って言った」

口元をタオルで拭いながら呼吸を整えた和葉に、しれっと言う昴。

「…………殴っていいか？」

「いやいや和葉くん、目がマジだよ、軽いジョークだって」

胸倉を掴まれようと昴はにやにや笑っている。

呆れて手を放し、夏だろうと変わらないその長い前髪を、鬱陶しそうに和葉は見た。

「お前、よく暑くないなその髪。蒸れそうだ」

「慣れれば平気だって。……ま、面倒な理由があって伸ばしてるんだけどな」

気が向いたら切るよ、とさらりと流し、再び昴はあの封筒を取り出した。

「で、本当にいらないのか？ 本人に了承なく、とかいうのは一応問題ないことになってるから気にするな。浹の隠し撮りは公式にも売られてるしな」

「…そんなのあるのか？ お前、止めなくていいのかよ」

「ん？ ああ、大丈夫大丈夫。ちゃんとして、教育的指導は済ませてあるさ」

そう言っただけで笑った昴から何か恐ろしいものを感じて、和葉は一步引く。

「で、これは俺が撮ったもので、許可も一応取っているようなものだから、気兼ねなく受け取れるぞ。ほらほら、いらないのか？」

「も、問題なくても、何で俺が浹さんの写真を受け取らなきゃいけないんだよ」

「なんでって…」

じ、と視線を感じる。昴は顔はあまり見えなくても、やけに視線が鋭いことは周知の事実だった。

「な、なんだよ……」

「……いや、なんでも？　はー、どうしたらそこまで鈍くなれるのかね」

後半の台詞は小さく呟かれ、和葉の耳には入らない。

前途は思ったより多難か？　と内心苦笑した。あれほど気にしているながら、自分がどんな思いを抱いているのかわからないなんて、鈍すぎるにも程がある。

「理由なんてどーでもいいよ、お前は、これが、欲しいか欲しくないか！」

「……」

「断ったら佐原にでもや、」

「いる！！」

最初からそう言えよ、とにやにや笑いを浮かべて、その封筒は和葉の元へ渡った。

浹さんごめんなさい、と謝り、これは出さずに大事に保存しておこうと和葉は思った。

その時だ。香月の方から、爆発的な歓声が上がったのは。

「な、何だ……？」

多くの人々が驚いたようにそちらを見遣る中、昴はふっと笑い、和葉の腕を引いてどこかへ連れ出す。

始まったか、と言って、そのまま走りだした。

「は？　ちょ、昂っ！」

その脚力たるや、和葉は目を見張った。

勉強も運動も、昂はいつでも中庸だった。それがどうだろう。足の速さには少し自信がある和葉と同等の力があることが、これでわかった。

この間から、薄々感づいてはいたが、どうやら彼は普段から、余計に目立たぬようにさりげなく自分を集団の中に紛れ込ませようとしている。そう言ったことが故意にできるのは、優れた能力を持つからではないのか。

そう感じながら足を動かしていると、人ばかりから外れた、香月と灯陽の運動場を隔てる小さな森のようなものの前に来た。

林と呼んでも良い程の小さな木々の地帯だが、そこはかなりたくさんの木々が密集していて、まるで向こう側が見えないようになっている。

建築の仕様の外壁が作れなかったのだろうかと思うのだが、流石に女子校と男子校の垣根なので、そこからは互いの領域への行き来が著しく困難になっていた。

何しろ体を通る程の隙間もない程に木々が生えている上、互いに監視カメラが設置されており、どちらかにどちらかが侵入した姿を捉えた場合、警報音が鳴り響く仕組みになっているのだ。その辺りは金持ち学校ならではのいうか、そのシステムを設計した天才が昔香月に在籍していたかららしいのだが。

その仕組みが出来るまでは定期的に警備員が立っていたそうだが、今でも一日に数回は警備の巡回がある。

そこへまっしぐらに向かっていく昂には躊躇いが全くない。和葉は慌てた。

「おい！　昂！　何するつもりだよ、そっちは香月の――」

振り向いた昴の口元は悪戯っぽい少年のように歪められており、長い人差し指が立てられ、「しー」と言いたげな動作をしていた。

「大丈夫、捕まる心配はない」

そう言うと、彼は周りに見ている人間がいなかさつと確認すると、林の中へ和葉を追いやった。

押しやるようにして追い立てられては、そのまま進むしかない。

ある木の幹を登れと言われた時は流石に異議を唱えようとしたが、有無を言わさぬ雰囲気に気圧されて、しぶしぶと枝に手を掛けて登って行った。

木登りなんて、何年ぶりだろうか。

ある程度の高さまで登ると、ぐいっとな服の裾が引かれて、バランスを崩しかけた。

「危なっ……！ おい、何だ——」

「止まれ、そのまま向こうを見る」

「はあ？」

木にがつちりしがみ付き、腹を立てながらも、横から伸びた手が指示す方向を見て——和葉は、動きを止めた。

香月の全校生徒がテントの中から、じっと彼らと同じ方角を見つめている。

先程までの歓声は嘘のように静まり、誰もが口を閉ざしていた。

木の上ということもあり、運動場が一望できた。

その中心に、数人の生徒が立っている。

遠くてもわかった。その中でも先頭に立つ少女は、宮城渕だ。

「月姫」と謳われる少女の兄は隣から、どこから取り出したのか、双眼鏡を押しつけてきた。

二つ持っていたようで、昴は既に双眼鏡を構えている。

そして、小さな丸い穴から覗いた先で、和葉は今までに見たことが無い程に洗練された「美」を見ることがなる。

上衣は、小袖のような淡い薄紅色の混じった白い合わせ着に、下は深い紅の袴。神道の巫女の千早とは違うようだが、それにどこか似た衣装を見事に着こなし、背に見事な黒髪を結わずに垂らした少女の姿は、凜とした静謐な美しさを誇っていた。

浹が、長い裾を纏めて優雅に一礼すると、着物の袖に留められた大振りの金色の鈴が、ちりーんと鳴る。

その場を清めるような綺麗な音だった。

そうしてゆっくりと開かれた扇には、舞い散る桜と月が描かれていた。

背後に並んだ少女達が、横笛に口をつける。

すうつと横に流された扇を合図に――世にも美しい舞いが始まった。

(4)

それはまるで、泡沫の夢の如く。
香る月の地に、麗しき姫が舞い降りた――。

後日、新聞部発行の学校新聞『月のいとま』の一面を飾ったのは、
宮城浹が踊っている場面に添えられた、そんな文字。

新聞部の部長や香月の人々は惚れ惚れする出来合いだと満足したが、
本人は一人恥ずかしがったとか。
しかし、まるで物語のように、彼女の舞いは美しかったのだ。

鈴の音と笛の音色が混じり、純粋な高音が統べる場で、音の美しさに
負けず劣らず、浹は鮮やかに舞って見せた。

ひらひらと蝶のように舞う袖は、優雅に翻り、白と紅、それに彼女の
黒髪が何とも言えない情景を描き出していた。

人々は息をひそめてただじっと、気高い舞姫の動きに見入る。

一切の雑音が聞こえぬ程に鎮まり返った香月の校庭にて、浹は僅かな
ぶれも見せずに軽やかに舞った。衣服に鈴が絡みそうなものを、
絶妙な手捌きで美しい衣装を操った。

緋色の草履が土を擦る音も、ほとんど聞こえない。

まるで彼女の周りだけが時間の流れが違つかの如く、静謐な雰囲気
が漂っていた。

衣装だけでなく、扇の扱いも見事としか言いようがなく、手首の返
しから扇の開閉の手つきまで、何もかも申し分なかった。

朱を刷いただけの簡単な化粧は彼女の美しさを際立たせ、舞うその

顔はどこか扇情的な色香を見せる。

笛の音が最高潮に達した瞬間、浹は嫣然と微笑んで見せた。

正に、月姫と言うに相応しい舞い。

全ての音が止み、彼女が優雅に一礼した数秒後に、はっと我に返った観客は全員、凄まじい歓声を上げて、少女の美舞を称えたのだった。

歓声にびくりと震え、気になる少女に陶醉していた自分に気付いた和葉は、瞬きを繰り返し、見惚れていたことに顔を熱くした。

何故だかどぎまぎとしながら顔を横に向ければ、相変わらず前髪に隠れて見えないながら、口元を三日月に歪めてにやりと嫌な笑みを浮かべている友人と顔を合わせた。

「……何だよ」

「いや。いいもの見れただろ？ 感謝しろよ」

「……………」

そりゃあ礼を言う程のものだったとは思うが、この男に素直に感謝を述べるのは物凄く癪に障る。口をへの字に曲げ、眉間に皺を寄せていると、昴はそんな和葉を置いて、するすると木を降り始めた。

「あ、おいっ」

置いて行かれそうになり、和葉は慌てて声を上げる。

既に地面に着地しようかとしていた昴は振り向き、口の前に人差し指を立てた。

「あんまり大きい声を出すな。あ、もうすぐここ見回りが来るからな、早く降りた方がいいぞ。切っておいた監視カメラも運転を再開するし」

「は……………」

ぽかんと口を開ける和葉を余所に、とんでもないことを抜かした昴はさっさと走り出してしまった。

その後ろ姿を見て、和葉はかつてない程に敏捷に木を降り、茂みを走り抜ける。

ちらりと後ろを見れば、視界の端を警備員と思しき姿が掠め、間一髪だったと冷や汗を拭う。

とつくに、友人の姿は無い。

後で絶対殴ってやると怒りの炎を燃やしながら、まだ興奮冷めやらぬ人々の声を背中に、『月姫』と謳われる少女の舞いの美しさに心を囚われたまま、やや名残惜しげに和葉は自校の体育祭へと戻って行ったのだった。

——そうして、時は満ちる。

それぞれの高校の中でもいくつかの団に分かれ、戦っているため、どの団が勝ったかを競うことも大きな目標である。それ故に午後の競技の最後は大きな得点源となる全学年対抗リレーがあるのだが、その競技の二つ前に、緋桜祭・蒼牙祭におけるある意味最大の競技が行われる。

香月と灯陽の威信を懸けたと言っても良い、両校合同競技。

それは、代表選手による——『借り物競走』だった。

たかが借り物、されど借り物——彼、彼女達は、スタートしてから自らの母校ホームではなく、指定されたものを、他校まで向かって、借りに行かねばならない。勿論安全が確保されるよう最大の配慮はされており、選手だけが互いの校門を潜ることができるのだが、敵の本拠地から目的のものを持っていかなければならないということは、かなり厳しいものがある。

しかもその指定される中身はいつもなかなかにして厳しいものがあり、彼らは必死に知恵を絞るのだ。

(4) (後書き)

そろそろ体育祭編も終わりたい…。

開校以来の伝統行事たるこの競技は、年に一度の、両校の誇りをかけた聖戦、とも言える。

同じ時刻に、両校の生徒会長が壇上に上がった。

そうして、白線の前で構える生徒と、彼ら彼女らを応援し、期待の目で見守る人々へ激励の言葉を贈る。

今回は香月が勝てるよう祈っていますと告げた『月姫』に対し、連覇を達成しようと鼓舞する『陽王』——灯陽とうようの生徒会長——そのどちらにも互いの生徒達は奮起し、盛り上がりを見せた。

そして鳴らされる、スタートの合図。

選手達が走り出した。

同時に、数多くの生徒達が何故か同じくスタート地点に並び、爛々と目を輝かせている。あたかも獲物を狩る獣のように。

そう、緋桜祭・蒼牙祭における合同対抗競技、『借り物競走』は、別名を『狩り者競争』——鬼ごっこ、とも言う。

両校から選出される選手は、各学年の各クラスから一名ずつ。十クラスずつあるので、三十人だ。

互いの学校に潜入する際、大半の生徒達は、自校に侵入してきた相手校の生徒を捕獲することができる。妨害工作である。

流石に男女では体力や力の違いを考慮して、生徒会役員と体育祭実行委員以外の、香月では全校生徒の三分の二、灯陽では三分の一が鬼ハンターとして参加できることになっていた。

借り物競走には一時間の時間制限がある。その間は借りるものを両校の出口に設置されている審査場まで持ち込まない限り、相手校から出てはいけないうることになっている為、選手達は借りるものを探しつつ、鬼から逃げ回らなくてはならない。しかも、鬼は選手を捕ま

えた人数分だけ点数が入るので、鬼達も必死になって選手を探すのだから大変だ。

校内の大半がその鬼ごっこの舞台であり、審査場のある正門近くの半径十メートルは鬼が捕まえることのできない安全区域となっているが、借りる物を得たとしてもそのセーフティ・ゾーンまで辿り着く前に鬼に捕まればアウトである。

狩る時に相手に怪我をさせてはいけないという決まりもあり、万が一の何か不祥事があつてはいけないからと、不測の事態にも備えて各々の学校で体育祭実行委員も警備として見回りをしているから、今までに問題が起こったことはないが。

かなり厳しい競技であるので、参加したがる人間は少ない。だが必ずクラスで一人は生贄が必要なので、和葉のクラスでは皆がほつとしたものだった。

「……………行つたか……」

選手たちがスタートし、各々の借り物が書かれたくじを引いて相手校へ向かってから五分後、鬼達もまた狩りを開始した。

くじに書かれていた内容に動揺しつつ、いきなり鬼に見つかりそうになって、慌てて木の上に隠れていた和葉は、香月の女生徒達が下を走り去っていくのを見送って、ほつと安堵の息を吐いた。

次いで、自分のくじを見て頭を抱える。借りる物は必ず相手の学校に存在するものに限られているのだが、それを見つけるのもまた一苦労なのだ。まるで宝探しである。和葉が引いたのは——何と驚くべきことに、『灯陽の校章が入ったハンカチ』だったのだ。

つくづく運が良いのか悪いのか。

他の一般生徒には、相手校で自校の校章が入ったハンカチなんてどうやって見つけるのかと困らせる内容だろうが、和葉はこの借り物の在り処がもうわかっている。まさか昴の陰謀かとちらりと考えたが、流石にそこまで出来ないだろう、と自身の考えを打ち消した。

問題は。

「……………うじゃうじゃいるのに、どうやって屋上まで行けば…」

はー、と溜息をつきかけて、ふと、右手に持った袋の存在を思い出した。

事前に認可を得ていれば、危険物等以外ならば少々の道具の持ちこみは許可されている。和葉は何も準備していなかったが、校舎を出る際に、昴に「差し入れだ」とさして大きくはない布袋を渡されたのだった。

何なのだろう、と開けて見てみれば。

「……………げえ……………」

心底嫌そうな声だった。

「……………」

「おや、星華の君。俺に何か用？」

にやにやと人を食ったような笑みを浮かべる天敵を睨みつけるようにして、礼芽は無言で応えた。わかっているくせに聞くな、と言いたげな顔で。

昴は軽く笑う。

「なーんてな。コイツが目当てだろ？」

所謂、瓶底眼鏡——漫画等で良く見るようなぐるぐる渦巻きのそれではないものの、厚いレンズに太い黒のフレームのデザイン性皆無な眼鏡。

生徒会役員や体育祭実行委員でも、時にはクラスでこの競技に出場しなければならぬ。生徒会長だけは参加することができないのだが、毎年一人は生徒会からも選手として借り物競走には出場していた。今年は運の悪いことに、霧崎礼芽はそれにあたってしまったのだった。

実は彼女は、くじ運が無い。

『瓶底眼鏡』とでかでかと書かれた紙を握り潰して、思わず投げ捨てそうになったのは、今時瓶底と呼ばれるような眼鏡を掛けている人物が、目の前の人間しか思い至らなかったからである。例え度が入っていないくても、瓶底は瓶底。

そこは灯陽の校舎の一角で、たまたま他に人はいなかった。が、昴は鬼の一人でもあるので、礼芽を捕まえようと思えば捕まえられる。しかし彼は、彼女を捕まえようという気は毛頭ないらしい。

「貸してもいいけど？——ただし」

眼鏡を外し、浹とよく似た顔で、悪戯っ子のように昴は笑う。

「ひとつ、今度手伝ってもらいたいことがあるんだけどね」

楽しそうに言われて、礼芽は無表情だった顔の眉間に皺を刻んだ。

「……誰も疑わないのも、どうかと思う」

ぼそりと小さな声でばやきつつ、和葉は香月の校舎内をてくてく歩いていった。

彼が歩いているのを、香月の生徒達は目で追いつつも、追いかけるしない。あんな可愛い人いたかしら、という呟きを聞いた時は死にたくなった。

そう、昴から貰ったのは灯陽のジャージと色違いのそれ、香月の白い体操着だった。プラス、いつぞや被った覚えのあるかつら。

——何故今日は二度も女装せねばならぬのかと憤慨したが、背に腹はかえられない。

貴重品はまとめて管理され、大事なものや機械等がある部屋には施錠がされているが、それ以外の教室等は探し物をしたり隠れ場所にしてよいことになっている。

どこかに仲間が隠れているのだろうか、もう何人も捕まってしまったか——見られる度に冷や汗をかきつつ、平静を装って和葉は香月を歩いていく。

屋上に向かう際は、人の目がないか、とても目を配った。こんな時に普段行かない場所へ向かっているのが見られれば、変装している敵ですと言っているようなものだ。

「……ちよつとあなた」

突然声を掛けられると共に肩をぽんと叩かれて、和葉は飛びあがった。

「は、はい！」

振り返った先にいたのは、一人の女子生徒だった。もしやばれたのかと血の気が引く思いで見れば、相手は不思議そうにこう告げた。

「あちらの方は灯陽生は誰も見当たらなかったわよ。もしかして、

忘れ物でも？」

「は、い。実は……」

「腕章かしら？ 早く皆と合流しないと駄目よ。一人ではもし灯陽生と遭遇しても対処しづらいでしょうから。私ももう行くから、急いで忘れ物を取ってくるようにね」

「はい……」

そう言うと、女子生徒は笑顔で手を振って去っていった。

二年か三年なのだろう。どう考えても下級生に対する扱いだったので、自分は一年生と思われているに違いない。

男とばれなくてよかったが、和葉の心中は物凄く複雑だった。

「……どうせ、女顔で童顔だよ……」

彼は私服で中学生と間違われたことが何度もあった。

外見は結構コンプレックスである。宝の持ち腐れと身内は言うが、男らしさに憧れるのは年頃の少年として仕方ないだろう。

先程よりも肩を落として、とぼとぼと屋上へ向かった。

もしかしたら回収されているのでは、とひやひやしたが、あの日彼が括りつけた位置にハンカチは結びつけられたまま。

浹は回収しなかったようだ。ほっとした。

結び目を解いて、ハンカチを手にした所で、ふと灯陽の屋上に目が行った。

誰かいる。

目を凝らせば、人影が二つあるのが見えた。

何やら言い合いをしているようにも見えるが、確か一人は灯陽の生徒会のメンバーではなかっただろうか……。

相手は見覚えがない。二人で屋上の見回りに来て、何か口論になったのかな、と思いつつ、灯陽では皆が喧嘩しながらも仲が良かったので、特に気にもせず、和葉はその場を去ることにした。

ふと、ポケットに手を突っ込むと、何か入っていることに気付く。取り出したものは、白い布に金色の糸で「KATSUKI」と刺繍が施された腕章と、数字が書かれた小さなメモ、そして一本の鍵。先程出会った女子生徒が腕章が何とか言っていたが、このことか。そう言えば、すっかり忘れていたが、灯陽でも鬼役は腕章を腕につけている。あちらは「TOYOU」と刺繍された黒字に銀の腕章だ。

今までつけてなくてよくばれなかったな——それ程彼が少女にしか見えないという証でもある——、今更ながら腕章を着する。

メモの数字はこの間とは違うが、フェンスの鍵の番号だろう。定期的に変更しているようだ。

階段を駆け下り、辺りの様子を伺いながらドアから出る。

ジャージをまた着替えなければ戻れない。

荷物は先程登った木の上に置いてきたので、そこまで戻るのに非常に気を遣った。

自分のジャージに手を通すと、やっと人心地つく。制服でないだけましだが、女装はやっぱり気が重かったのだ。

かつらを外して、袋の中にジャージと共に突っ込む。

順調にこのまま正門まで行けるだろうか、と辺りを伺いながら木から下りた所——死角となっていた建物の陰から、香月の生徒が数人やってきた。

両者、一瞬固まる。

「ひ、標的はっけーん——！」

元気よく叫んだのは、少々背の低い、茶色の髪を左右で結んだ少女。

「決様のためにも、捕まえるぞー！」

突進するように少女が走り出すと、他の生徒達も駆け出した。

まずい、と和葉も全力で逃走する。流石にそうそう物事はうまくいかないらしい。最後の最後でこれだ。

決のため、と言っているからには、恐らく噂の親衛隊の人間なのだろう。

彼女達は心酔している決にこの競技の勝利を捧げようと必死だと聞いた覚えがある。

向こうは死に物狂いとも言える勢いだ。こちらでも死ぬ気で逃げなければ危うい。

俊足と言われているように、乙女たちのパワーを振り切るには徒競争以上の気力が要った。

しかも、何と正門付近では当然のように別の女子生徒の集団が待ち構えている。

囲まれる、と焦った和葉は、思い切って跳躍すると、手近にあった木の枝にぶら下がり、その勢いのままぐるりと回って木の上に飛び乗った。

そして、隣接した塀に飛び移ると、そのまま道路にジャンプする。

軽い足音を立てて着陸した後、和葉は一目散に審査場へ駆け込んだ。啞然として一連の様子を見ていた少女達は、嘘のようなその光景から、思わず呟いたのだった。

「……猿……？」

和葉は審査も通り、大きな得点を上げることとなったが、後日、『障害物競争で猿のような小柄な少年がいた』という香月の噂を耳にして、「猿じゃねえ！」とご立腹することになる。

(5) (後書き)

体育祭が、終わらない……。汗
久しぶりですみません……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7221i/>

月と太陽の狂騒曲

2011年2月5日15時45分発行